

挨拶

本日は日本水産学会の御後援により、鹿児島大学南方海域研究センターの主催で、「南方漁業の未来像」という壮大なテーマでシンポジウムが開かれることになり、このように多数の御出席をいただいたことを非常にうれしく思います。

南方漁業というのは、日本民族にとって昔からの大きなロマンであり、特に南九州の男達にとっては生き甲斐の場であったと存じます。そのような関係もあって鹿児島大学は早くから水産学部を持っておりまして、南方海域研究センターも数年前に発足して、南方に関する学問的情熱を燃やしている訳でございます。

私は専門が異なりますのでシンポジウムの内容を十分に理解している訳ではありませんが、二つの大きなテーマについて御報告があると承っております。先程申し上げましたように、南方漁業は我々日本民族にとってロマンの場であったのですが、漁業の規模が大きくなり漁場が広がっていくに従って色々な問題点が出て参ったと思います。特に漁場の拡大は、かつての海の概念（公海という共通の広場を意味する）の否定につながって、種々の難問が国内的にも国際的にも生じております。魚が世界人類の大事な食糧資源であるだけに、長い目でその未来を見つめていかねばなりません。その意味で、漁業というものを政治的側面からだけでなく、学問の場においても取り上げる必要があります。

本シンポジウムでこれらの問題について種々の貴重な御報告があり、それをめぐっていろいろの御意見が討議されるということは、まことに意義深いことと感じます。

大学にとりまして、これは学問の前進のための有意義な刺激になると信じます。

本日のシンポジウムが実りある成果をあげますように、心から祈念して御挨拶と致します。

鹿児島大学学長 石神兼文